

原著

## 母親の身近な人間関係におけるストレス感と 不適切な養育行動の関連性について

浦山晶美<sup>1</sup> 金川克子<sup>2</sup> 大木秀一<sup>2</sup>

### 概要

1歳6か月・3歳児健診に訪れた母親を対象に、母親の身近な人間関係のストレス感がどのように育児態度に影響するのか、その関連性を明らかにする目的で534名に自己記入式質問紙を配布し383名から回収された。調査は無記名とし回収は郵送で行った。結果は、子ども、夫の親に半分以上の母親がストレスを感じており、次いで多かったのは夫であった。子ども、夫に対してストレス感があるときには、他の人間関係にストレスを感じている場合よりも不適切な養育行動が多く項目において有意にみられた。また、母親が子どもにストレスを感じているものは、感じていないものよりも、夫、自分の親、夫の親、近所付き合い、親戚付き合い、の人間関係に有意にストレスを感じているものが多いことが認められた。それらの中でも、特に夫とのストレス感との関連性が強かった。これらの結果から、母親のストレスを軽減させるには、まず夫にたいするストレス感を緩和させることが重要であり、そのことが子どもに対するストレス感の緩和に繋がるのではないかと考えられた。それには、夫が母親にとって人生の重要なパートナーであるという役割を果たすという要因が、子どもへの不適切な養育行動の改善に繋がると推測される。

**キーワード** ストレス、夫婦関係、不適切な養育行動

### 1. はじめに

社会の子育てへの関心がたかまり行政の育児支援に対する取り組みがなされているにもかかわらず少子化は進む一方である。その要因の一つに母親の“育児の心身の負担”があげられ、社会の環境変化等からも育児はストレスが伴うものと捉えられるようになってきた<sup>1)</sup>。そして、子どもは可愛いと一緒にいると息がつまるという母親が増えている<sup>3)</sup>。平成15年の厚生労働白書の「育児不安を生み出す子育ての実態」の調査報告では、子どもといると「イライラすることが多い」と答える母親が10.8%から30.1%に増加してきている。H16年に行われた日本小児保健協会の「幼児健康度調査」では、既に「子どもを虐待しているのではないかと思うときがある」と答えた母親が全体の2割以上であったと報告している<sup>4)</sup>。このように子育て期の母親が抱えているストレスや不安感・育児困難感が増加傾向にある。母親のストレスが高まれば、それが母親の育児態度に影響を与え、時には虐待的な養育行動に陥りやすくなることもある<sup>5)</sup>。母親の身近な人間関係、特に夫や日

常生活の中で関わる重要他者との人間関係に関するストレスは母親の養育態度に影響を与える。Bolger<sup>6)</sup>は、人間関係の葛藤が最も困惑させるストレスラーであると述べ、ストレスは「感情的な八つ当たり」として、無意識に感情の捌け口を立場の弱いものに向けていることも考えられる。

母親のストレスからくる感情が時には虐待的な養育行動に陥らせていることも考えられるが、しかし、子どもにとっては、そのような養育態度を蓄積してうけることによって、自尊心が傷つけられ健康な発達を阻害する要因となりうる<sup>7)</sup>。子どもにとって大切なことは、親密で安定した継続的な家族関係を通して子どもに安心感、安全感を与えることであり、それには親自身の人格的成熟と夫婦及び重要他者との人間関係の安定を保つことは重要なことであるが、具体的に母親の人間関係のストレス感がどのように母親の養育行動に影響を与えているのか、その実態を調査した研究はまだ見当たらない。そこで本研究は、母親の身近な人間関係のストレス感と不適切な養育行動の関連性を明らかにすることを研究目的とした。その関係性を明らかにすることによって、母親のストレスを緩和することの意義を確認し、そして、子育

<sup>1</sup> 石川県立看護大学大学院博士後期課程（地域看護学）

<sup>2</sup> 石川県立看護大学

て支援の方向性を検討し得る一資料となりうると考えた。

## 2. 対象と方法

### 2. 1 対象者

石川県 K 市内の健康センターで開催されている1歳6か月児健診と3歳児健診に訪れている母親534名に質問紙票を直接手渡した。K市の人口は約45万人で、県内全人口の約38%を占めており、人口増加率や、少年人口(0~14歳)の割合が最も高い地域である。

### 2. 2 調査内容および方法

不適切な養育行動は、内山<sup>8)</sup>らが虐待行為の実態を調査するために作成した質問項目の中から、児の年齢に不適切なものや母親が明らかに不快を感じさせるような項目を除いて9項目を選出した。その他、虐待不安の内容を聞く2つの項目を追加した。本研究における不適切な養育行動の質問は全部で11項目あり、回答は4件法で「ない」「たまにある」「時々ある」「よくある」である。質問の内容は身体的暴力に関するものは、頭をたたく、顔を平手打ちする、ひどくつねる、物を使って叩く、等である。ネグレクトに関するものは、風呂に入れたり下着を替えたりしない、自動車内に放置する、等である。心理的なものは、ひどく感情的になって八つ当たりする、傷つけるような暴言を言う、である。虐待不安に関するものは、たたいてしまいそうで怖い、何をするかわからない、である。調査票記載時には、健診に連れてきた子どものことを想定して記入して頂いた。母親がストレスと感じる身近な対象者として、子ども、夫、自分の親、夫の親、近所付き合い、親戚付き合い、である。回答は、各身近な対象者について「ストレスを感じますか」との質問に対して「とても」「少し」「ない」の3件法である。社会的属性として、家族形態、年齢、就業状況、子どもの数、児の特別な障害(先天的な異常、分娩外傷、発達障害)、双子の有無等である。調査期間は2005年の7月から9月にかけて実施した。

調査は無記名とし回収は郵送で行ない、会場内での記入を希望した母親には記入場所を設置して、記入後封をしてから回収箱に入れてもらった。

### 2. 3 倫理的配慮

石川県立看護大学の倫理審査会の承認を得た後、K市内の3箇所の健康センター長の書面による同

意を得た。健診に訪れている母親一人ひとりに研究の目的と、調査に協力しなくても一切不利益が生じないことを口頭と紙面上で説明し、了解が得られたものには直接封筒に入った調査票を手渡した。

### 2. 4 分析方法

統計ソフト SPSS13.0J を用いて、ストレスを感じる対象者と不適切な養育行動との関係性を $\chi^2$ 検定で統計解析を行い、有意水準は5%未満を採用した。

## 3. 結果

### 3. 1 対象者の属性

調査票の配布数534で回収数は383(回収率71.7%)であった。対象者の平均年齢は31.9歳で標準偏差値は4.9歳であった。家族形態は全体の80%以上が核家族であり、全体の62%の母親が専業主婦であった。母親一人が持つ子どもの数の中央値は2人で、双子を持つ母親は5人(1.3%)であった。特別な障害児(先天的な異常、分娩外傷、発達障害等)をもつ母親はいなかった。対象者の特性は表1にまとめた。

表1 対象者の属性 (n=383)

調 査 項 目	全 体	
母 の 年 齢 ( 歳 )	31.9(±4.9)	
家 族 形 態	核 家 族	309(80.7)
	複 合 家 族	74(19.3)
母 の 就 業	主 婦	238(62.2)
	パ ー ト	61(15.9)
	常 勤	84(21.9)
母親一人 あたりもつ 子どもの数	1 人	149(38.9)
	2 人	171(44.6)
	3 人	55(14.4)
	4 人	5(1.3)
	5 人	1(0.3)
	6 人	1(0.3)
	無記入	1(0.3)
妊娠の形態	単 体	375(97.9)
	多 胎	5(1.3)
	無記入	3(0.8)
児 の 障 害	発 達 障 害 等	0

( ) 内は各項目の割合 (%) を表す

### 3. 2 不適切な養育行動と母親がストレスを感じている対象

(1) 不適切な養育行動の集計結果は表2に示した。不適切な養育行動11項目のなかで、多かった

のは「感情的八つ当たり」で、「たまにある」「時々ある」「よくある」をあわせると 76%であり、次いで「頭をたたく」が 56%、「傷つける暴言をほく」44%、ネグレクトの項目の「風呂に入れない」は回答者のうち 2 人 (0.1%) であった (%は無回答を除いて計算した割合)。

(2) 母親がストレスと感じている対象の集計結果は表 3 に示した。母親がストレスと感じている対象で最も多い相手は「子ども」で、「少しある」「かなりある」を合わせると全体の 62%で、次いで「夫の親」が 54%、「夫」は 52%であった (%は無回答を除いて計算した割合)。

### 3. 3 母親がストレスを感じる対象と不適切な養育行動との関連

不適切な養育行動 11 項目に対して、その出現率が、母親のストレスを感じる対象に「ある」「ない」のそれぞれの群で異なるかどうか確かめるために  $\chi^2$  検定を行った。「母親の不適切な養育行動」「ストレス感」を 3 または 4 件法で行ったが「よくある」「とても感じる」という回答が少なく、統計処理を行うにあたり期待度数の小さいセルが多くなることによって分析が困難になるた

め回収された回答を「はい」「いいえ」の 2 段階に分類し直した。不適切な養育行動は 4 件法の中、「よくある」「時々ある」「たまにある」を併せて「ある」とし、母親のストレス感については 3 件法の中、「少しある」、「かなりある」を併せて「ある」とした。また、無回答のものは分析から除き 325 名を有効回答 (60.9%) とした。これから述べる結果は、2 段階の回答分類で、有効回答 325 名から導き出されたものである。その結果を表 4 に示した。

以下に、母親がストレスを感じる対象者と不適切な養育行動 11 項目のうち、いくつの項目と関連しているかをまとめた。

(1) 子どもにストレスを感じているものは、不適切な養育行動 11 項目中 7 項目がストレスを感じていないものよりも有意に多かった。

(2) 夫にストレスを感じているものは、不適切な養育行動 11 項目中 6 項目がストレスを感じていないものよりも有意に多かった。

(3) 自分の親にストレスを感じているものは、不適切な養育行動 11 項目中 2 項目がストレスを感じていないものよりも有意に多かった。

表 2 不適切な養育行動の結果 (n=383)

	ない	たまにある	時々ある	よくある	無記入
感情的八つ当たり	92(24.0)	227(59.3)	46(12.0)	13(3.4)	5(1.3)
頭を叩く	166(43.3)	170(44.4)	32(8.4)	9(2.3)	6(1.6)
傷つける暴言を言う	213(55.6)	117(30.5)	38(9.9)	10(2.6)	5(1.3)
顔を平手打ちする	287(74.9)	77(20.1)	11(2.9)	2(0.5)	6(1.6)
ひどくつねる	345(90.1)	25(6.5)	5(1.3)	10(3)	7(1.8)
物を使って、たたく	353(92.2)	22(5.7)	2(0.5)	0	6(1.6)
物を投げつける	323(84.3)	46(12.1)	6(1.6)	10(3)	7(1.8)
風呂に入れない下着を替えない	375(97.4)	2(0.5)	0	0	6(1.6)
自動車内に放置する	338(88.3)	32(8.4)	6(1.6)	0	7(1.8)
たたいてしまいそうで怖い	217(56.7)	118(30.8)	22(5.7)	15(3.9)	1(0.3)
このままだとなにをするかと、不安になる	329(85.9)	34(8.9)	10(2.6)	3(0.8)	7(1.8)

( ) 内は各養育態度の割合 (%) を表す

表 3 母親がストレスを感じる対象についての結果 (n=383)

対象	ストレス感			
	ない	少しある	かなりある	無記入
子ども	139(36.3)	206(53.8)	18(4.7)	20(5.2)
夫	170(44.4)	160(41.8)	21(5.5)	32(8.4)
自分の親	266(69.5)	82(21.4)	7(1.8)	28(7.3)
夫の親	158(41.3)	135(35.2)	52(13.6)	38(9.9)
近所付き合い	236(61.6)	110(28.7)	8(2.1)	29(7.6)
親戚付き合い	239(62.4)	101(26.4)	11(2.9)	32(8.4)

( ) 内は各ストレス感のある対象の割合 (%) を表す

表4 母親がストレスを感じる対象と不適切な養育行動との関連 (n=325)

母親が ストレスと 感じる対象	不適切な 養育行動		感情的八つ 当たり		傷つける暴 言を言う		頭を叩く		顔を平手打 ちする		ひどくつね る		物を使っ て、たたく		物を投げつ ける		風呂に入れ ない下着を 替えない		自動車内に 放置する		たたいてし まいそうで 怖い		なにをする かと、不安 になる	
	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある
	n	n	84	241	184	141	147	178	255	70	298	27	304	21	279	46	323	2	292	33	195	130	284	41
子ども	ない	127	53	74	95	32	65	62	107	20	120	7	124	3	117	10	127	0	116	11	97	30	123	4
	ある	198	31	167	89	109	82	116	148	50	178	20	180	18	162	36	196	2	176	22	98	100	161	37
	$\chi^2$ 検定	P<0.00		P<0.00		ns		P<0.05		ns		P<0.02		P<0.01		ns		ns		P<0.00		P<0.00		
夫	ない	164	54	110	106	58	76	88	132	32	152	12	160	4	149	15	164	0	149	15	108	56	150	14
	ある	161	30	131	78	83	71	90	123	38	146	15	144	17	130	31	159	2	143	18	87	74	134	27
	$\chi^2$ 検定	P<0.00		P<0.00		ns		ns		ns		P<0.00		P<0.01		ns		ns		P<0.03		P<0.03		
自分の親	ない	248	74	174	151	97	115	133	198	50	227	21	230	18	216	32	246	2	222	26	148	100	218	30
	ある	77	10	67	33	44	32	45	57	20	71	6	74	3	63	14	77	0	70	7	47	30	66	11
	$\chi^2$ 検定	P<0.00		P<0.01		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns
夫の親	ない	151	47	104	94	57	70	81	119	32	139	12	144	7	131	20	151	0	135	16	93	58	139	12
	ある	174	37	137	90	84	77	97	136	38	159	15	160	14	148	26	172	2	157	17	102	72	145	29
	$\chi^2$ 検定	ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		P<0.02
近所付 き合い	ない	215	66	149	137	78	95	120	175	40	196	19	205	10	188	27	214	1	194	21	141	74	194	21
	ある	110	18	92	47	63	52	58	80	30	102	8	99	11	91	19	109	1	98	12	54	56	90	20
	$\chi^2$ 検定	P<0.00		P<0.00		ns		P<0.05		ns		ns		ns		ns		ns		ns		P<0.00		P<0.03
親戚付 き合い	ない	220	62	158	137	83	99	121	175	45	201	19	207	13	191	29	219	1	196	24	144	76	197	23
	ある	105	22	83	47	58	48	57	80	25	97	8	97	8	88	17	104	1	96	9	51	54	87	18
	$\chi^2$ 検定	ns		P<0.00		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		ns		P<0.00		ns

表5 母親のストレス感が「子ども」と「子ども以外」の対象間の関連 (n=325)

ストレスの対象 (子ども以外)	夫		自分の親		夫の親		近所付き合い		親戚付き合い		
	ない (n=164)	ある (n=161)	ない (n=248)	ある (n=77)	ない (n=151)	ある (n=174)	ない (n=215)	ある (n=110)	ない (n=220)	ある (n=105)	
子どもに 対するス トレス感	ない(n=127)	97	30	116	11	78	49	99	28	101	26
	ある(n=198)	67	131	132	66	73	125	116	82	119	79
	検定量	56.01		26.05		18.75		12.96		13.35	
	$\chi^2$ 検定	P<0.00		P<0.00		P<0.00		P<0.00		P<0.00	

(4) 夫の親にストレスを感じているものは、不適切な養育行動 11 項目中 1 項目がストレスを感じていないものよりも有意に多かった。

(5) 近所付き合いにストレスを感じているものは、不適切な養育行動 11 項目中 5 項目がストレスを感じていないものよりも有意に多かった。

(6) 親戚付き合いでストレスを感じているものは、不適切な養育行動 11 項目中 2 項目がストレスを感じていないものよりも有意に多かった。

### 3. 4 母親のストレス感が「子ども」と「子ども以外」の対象間における関連

母親が子どもにストレスを感じているとき、最も不適切な養育行動が多く認められることから、

子どもにストレス感が「ない」「ある」のそれぞれの群において、子ども以外のストレスを感じる対象者に対してストレス感の出現率が異なるかどうかを有効回答 325 名について  $\chi^2$  検定を行った。尚、母親のストレス感については 3 件法の中、「少しある」、「かなりある」を併せて「ある」として分析をし、結果を表 5 に示した。母親が子どもにストレス感があるものは、いないものよりも、全ての対象者（夫、自分の親、夫の親、近所付き合い、親戚付き合い）においてストレス感があることが 1%水準で有意に多いことが認められた。その中で最も強い関連性がみられたのは夫で ( $\chi^2(1) = 56.01, p < .00$ )、次いで、自分の親 ( $\chi^2(1) = 26.05, p < .00$ ) であった。

#### 4. 考察

##### 4. 1 母親の身近な人間関係のストレス感と育児行動について

核家族化、少子化、地域におけるつながりの希薄化により家庭の養育力の低下「子育ての危機」が指摘されている<sup>9), 10)</sup>。また、母親は一生懸命育児をしても、社会環境の変動の中で幾重ものストレスを感じ、また孤独感や母親自身の性格的な未熟さ等から不適切な養育行動に陥っているのが現状であるといわれている<sup>11)</sup>。本調査結果では『近所付き合い』に33%以上の母親がストレスと感じており、このことから地域とのつながりを持つことに何らかの難しさがあることが推測される。また全体の80%が核家族形態をとり、その中で母親がストレスを感じている対象に、『子ども』6割、『夫』5割と高い割合を占め、家庭内のストレスフルな状況がうかがわれる。

厚生労働省の調査によると少年非行も年々増加傾向にあり、このような深刻な状況の見直しの原点は家庭養育への支援とその充実にあると報告している<sup>12)</sup>。2000年に行われた厚生の指標調査の「児童虐待の疫学調査」の予備調査の結果では、有効回答494人中、親の養育態度としてよく見かけるのは「大声で叱る」「泣いていても放っておく」「頭をたたく」などが全体の6割から8割を占めていたと報告している。この首都圏の調査は虐待的な養育態度17項目を得点化し「虐待群」と判別されたのは全体の8.9%、虐待傾向群は30.4%で、約4割の母親が何らかの身体的虐待を日常の養育態度にみられると報告している。本研究の調査の結果では1歳6か月、3歳児健診に訪れた母親が対象で、調査回収数は383人で、そのうち回答された数について記述集計し、全体の母親の76%に「感情的な八つ当たり」、56%に「頭をたたく」、44%に「傷つける暴言をいう」などの養育行動がみられた。これらのことから、本研究で調査が行われたK市においても、首都圏で行われた調査と同じように上記に挙げたような養育行動が約過半数以上の母親にあることがわかった。不適切な養育行動または虐待は、身体的な暴力行為をイメージしやすいが、「感情的な八つ当たり」「傷つける暴言をいう」等は、心理的な虐待と言われている<sup>13)</sup>。そのような心理的な不適切な養育行動が日常的に行われることは、子どもの人格形成に重大な影響を及ぼすといわれ、特に言葉による暴力は自尊感情を傷つける。子どもの1-3歳ごろは「こころの曙」といわれ、自尊感情や基本的信頼感の中

核が形成され、人格形成の基礎が作られる時期である。そして、この時期の育児の内容はその後の人生に大きく影響する<sup>14), 15)</sup>。

母親がストレスと感じる対象が子どもの場合、不適切な養育行動11項目中、「感情的な八つ当たり」「傷つける暴言を言う」「顔を平手打ちする」「物を使って、たたく」「物を投げつける」「たたいてしまいそうで怖い」「このままだとなにをするかと、不安になる」の7項目が、ストレスを感じない母親よりも有意に多かった。次に多かったのは夫との人間関係でストレスを感じるものはそうでないものよりも不適切な養育行動6項目において有意に多かった。また、近所付き合いにストレスを感じている場合は、そうでないものよりも5項目において不適切な養育行動が有意に多かった。これらのことは、母親の生活の身近な相手、つまり自分の子どもや夫、そして近所付き合いにストレスを感じているほど育児の中で不適切な養育行動、特に「感情的な八つ当たり」が多く見られるという結果であった。

また、子どもにストレスを感じている者は、感じていない者よりも、夫、自分の親、夫の親、近所付き合い、親戚付き合い、の人間関係にストレスを感じている者が有意に多いことが認められ、その中でも特に夫にストレスを感じるかどうかとの関連性が強かった。ストレスはさまざまな要因が関与しているため一概にはいえないが、本研究の結果から以下のことが推測される。母親の身近な人間関係において、子どもとの関係にストレスを感じる者が一番多く、また子どもへのストレス感と夫へのストレス感の関連性が強いという結果から、夫へのストレス感の緩和を図ることは、子どもに対するストレス感の緩和につながるのではないかと考える。渡邊<sup>16)</sup>は、夫婦関係と母親の子育ての満足度の関連性について調査した結果、夫婦の対話時間が多いほど母親が育児に満足していると報告している。また、川崎<sup>17)</sup>、佐々木<sup>18)</sup>らの研究では、夫婦の精神的な結びつきが強いほど父親の育児の参加度が高くそれに対して母親の満足度も高いことを報告している。これらの先行研究から母親の夫へのストレスを緩和するには、夫からのサポートを得ることと夫婦の対話が重要な要因として考えられる。すなわち、夫が子育ての中で「人生の重要なパートナーであるという役割を担う」と同時に、夫婦が互いに理解を深めるようなコミュニケーションスキルを身につけることは母親の精神の安定性を図り、そのことが子

どもへの「感情的な八つ当たり」を減少させる等の育児行動の安定に繋がっていくと推測する。

#### 4. 2 子育て支援の今後の展望

育児で重要なことは、親密で安定した家庭の継続的な関係を通じて、子どもに信頼感、安心感、安全感を与えることである。それにはまず、親自身の人格的成熟と夫婦関係の安定、親密さを図り、暖かく支持的な家庭環境を持つことが重要と考える。両親の不和は当事者にとっては当然だが、子どもにとっても耐えがたい心理的なストレスとなる。子どもは、大人によって配慮された世話、情緒的にサポートされることにより、安定感、自己効力感、自尊感情が育ち、向社会的行動への内的動機付けが引き起こされる<sup>19)</sup>。様々な養育行動は、良しにつけ悪しきにつけ次の世代へと伝達される<sup>20)</sup>ことを考慮するならば、好ましくない養育行動が次世代に伝達しないように、また、子どもの精神発達を前向きに促すためには、なるべく早期に親となられる方に「養育行動が子どもに与える影響」についての知識を得ていただくことは重要なことである。医療従事者として、そのような働きかけができる場が考えられるものは、妊娠中の両親学級等である。妊娠中の両親学級のプログラムの中に、一般的な妊娠に関する内容とともに、親の役割について考える場を提供することは次世代育成支援に繋がるのではないかと考える。

調査内容において、「不適切な養育行動」「ストレスを感じる対象者」を、4件及び3件法で行ったが統計的な処理のため回答を2段階に分類し直したことにより、現実の状況をいささか強調した嫌いはあるが、しかし若干ではあるが、近年の子どもがおかれている家庭の養育環境についての知見が得られたのではないかと考える。

また、「不適切な養育行動」と「虐待」の境界線は不透明であり、そして「虐待の定義は難しい」という現実から、本研究の課題においては「不適切な養育行動」という表現を用いた。しかし、「不適切な養育行動が子どもの身体的精神的成長発達を妨げる」のであれば、それは「虐待的な養育態度」と表現することが適切かと考えられる。

#### 5. 謝辞

本研究の実施に際し、アンケート調査にご協力頂いたお母様方、並びに本研究の趣旨をご理解頂き協力していただいたK市内の健康センターの担当者の皆様に深く感謝を申し上げます。調査にあ

たり、石川県立看護大学の西村真実子教授にご指導を頂き心よりお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 厚生(労働)省・厚生省大臣官房政策課：少子化と人口減少社会を考える。1998。(www1.mhlw.go.jp/shingi/s1027-1.html)
- 2) 牧野カツ子：乳幼児を持つ母親の生活と育児不安。家庭教育研究紀要，3，34-56，1982。
- 3) 村上京子，飯野英親，塚原正人，他：乳幼児をもつ母親のストレスに関する要因分析。小児保健研究，64(3)，425-431，2005。
- 4) 日向雅美：育児に伴う母親の不安。小児看護，12(4)，415-420，1989。
- 5) 内山絢子：児童虐待の現状。中谷謹子。児童虐待と現代の家族。信山社，2-23，2003。
- 6) Bolger, N. et al. Effects of daily stress on negative mood. Journal of Personality and Social Psychology. 57, 808-818, 1989.
- 7) 友利久子，嘉数朝子，大城一子，他：子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーション。琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，6，111-133，2004。
- 8) 内山絢子：一般家庭調査における母親が行う虐待行為の実態，児童虐待とその対策。多賀出版，62-83，1989。
- 9) 文部科学省：家庭教育支援のための行政と子育て支援団体との連携の促進についての報告。2004。(www.nwec.jp/jp/data/shiryo\_h18jisedai.pdf)
- 10) 園部真美，白川園子，廣瀬たい子，他：母親の社会的ネットワークと母子相互作用，子どもの発達，育児ストレスに関する研究。小児保健研究，65(3)，405-414，2006。
- 11) 清水嘉子：育児ストレスの実態研究—ストレス情動反応を中心として—。母性衛生，44(4)，372-378，2003。
- 12) 徳永雅子，大原美和子，菅間真美，他：「首都圏一般人口における児童虐待の調査」。厚生指針，47(15)，3-10，2000。
- 13) 山崎晃資：子どもの発達とその障害。財団法人放送大学教育振興会，21-40，1995。
- 14) 前川喜平：親と子の心のカルテ。新興医学出版社，1998。
- 15) 三宅和夫：乳幼児心理学。財団法人放送大学教育振興会，19-52，1999。
- 16) 渡邊タミコ：父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関係。山梨医大紀要，2001；18：

- 47-53. Child Development project の理論と実践一. 順天堂  
医療短期大学紀要, 4, 70-79, 1993
- 17) 川崎佳代子: 育児感情・育児行動の実態及び関連  
する要因. 母性衛生, 41(1), 158-169, 2000. 20) 渡辺久子: 母子臨床と世代間伝達. 金剛出版. 2001
- 18) 佐々木裕子: 父親の育児行動と母親の満足度. 小  
児保健研究, 57(2), 181-189, 1998. (受付: 2008年7月8日, 受理: 2008年9月11日)
- 19) 山岸明子: 向社会性の発達を促す経験と教育一

## The Association between a Mother's Feelings of Stress in Close Human Relationships and the Consequent Unsatisfactory Approach to Raising her Child

Akimi URAYAMA, Katsuko KANAGAWA, Shuichi OOKI

### Abstract

This study aims to determine the relationship between a mother's stressful feelings about her close human relationships and her unsatisfactory approach to raising her child. The method used was an anonymous self-administered questionnaire for mothers (n=534) who visited health centers for routine child development check-ups in the Ishikawa prefecture. The number of valid responses obtained was 383, which were collected by mail. The results showed that more than half the mothers expressed their stressful feelings, first toward their child and mother-in-law, and second to their husbands. When mothers experience stress with their children and husbands, they tend to show a more unsatisfactory approach toward their children than those mothers who experience stress with other human relationships. Another result to emerge was that mothers experience stress with their children related to other close human relationships, especially when there is strong relationship between their children and their husband. It was also observed from the results that relieving the stress in her relationship with her husband, emerged as the key factor that contributed significantly to the reduction in the unsatisfactory approach, compared with relieving her frustrations with her other close human relationships. It can also be concluded that since her husband plays an important role as her life partner, the stressful feelings, resulting from that relationship, can be a significant critical factor.

**Keywords** Stress, Relationship between wife and husband, Unsatisfactory approach to raising child